

と早速平田さんを茶毘にする支度だ。近辺の一軒屋を取壊し柱などを井桁に組み戸板に乗せて、その晩、私は屍衛兵となった平田さんを見送った。平田さんの遺骨は生前愛用していた飯盒に納めて三角巾に包んで私の首に下げ、その後の作戦行動を共にした。

また、私たちの援護に駆け付けてくれた戦闘小隊も、その後、優勢な敵の迫撃砲の集中砲火の攻撃を受け、宮下中隊長をはじめ第一中隊の波多野分隊長など五、六名の戦死傷者の犠牲の出たことを作戦終了後になって聞いた（江南殲滅作戦は一、二期と区分され平田さんの戦死はその一期でした）。行動間は私の胸前にあって一カ月間を共にして、駐屯地の黄陂城に帰営したのは六月十八日ころだった。

全滅を期した

芷江（西湘）撤退作戦

三重県 松本 荘衛

芷江作戦は昭和二十年四月十一日夜、第一百六師団の挺進隊は集結地を出発し、四月十九日に所要の部署への進出を行ったが、その後の状況は重慶軍の抵抗は極めて頑強で、以後、米式装備の敵と対戦し、多くの損害を出しました。

―上膊部貫痛銃創を受く―

芷江作戦もいよいよ終止符を打つ時がやってきた。長途の進攻作戦も、敵正規軍の意外な抵抗を受け、その堅陣を抜くことができず、内地からはるばる来た援軍の「弾」部隊は敵の都市、新化の町で攻撃頓座して前進できず、左翼「広」師団の武崗で前進をはばまれての苦戦は兵器・弾薬・物資、特に食糧の欠乏によ

る。この食糧の不足は明らかに、敵の後方攪乱のあらわれで、芷江作戦に参画した三個師団は衡陽西北方湖南の山岳地帯で孤立状態となり、このまま作戦を続行するときは全員玉碎あるのみ。よつて速やかに各兵団は旧駐留地に向かつて反転作戦を敢行すべく、夜を日に次ぐ強行軍で一路宝慶県城、宝慶の警備地区に帰還すべく行動を開始するも、時すでにおそく、全く前後、左右敵包囲下に、にっちもさっちもいかぬ苦境に立たされてしまった。

その第一のあらわれとして、後方に待機していた「嵐」兵団の輜重兵連隊が槍玉に上がった。前述のごとく救援の師団命令を受けた第一三三連隊・加川連隊長は第三西口大隊を主力として、これが救助にあたりしめ、苦戦の末、その目的を達成し、引き続き反転作戦に移る。連隊主力は洞口く宝慶街道を一路後退し、第三大隊は山間地区より左側衛として山また山の山岳部の道なき道を地図と磁針を頼りに反転を敢行する。

疲労の度はその極に達した。将兵は死を超越した苦難を克服して夜は眠りながら、昼は退避を余儀なくさ

れつつ、歩き続けた。

戦場は鉄砲玉の音のする方向が敵だが、いざ反転作戦となると、前方、後方共弾丸は飛んでくる。本隊は左右両側衛に守護され、前は前衛、後は後衛尖兵に護られた中を後退するわけで、反転作戦は死をもつて本隊の反転を容易ならしむべく、しばしば後衛大隊尖兵は全滅の憂き目を見ることがある。だが今度の反転作戦は兵員に多大な損害を受けた後の反転である。その上、四囲に敵を受け、どの方向に行けば安全なる行動ができるかわからぬまま連隊が一団となって周囲を警戒しながら行動する。しかし統一した指揮行動は至難で、遅々として進むことができず、このまま時を過ぎせば全員玉碎するやもしれぬ最悪の状態に置かれていたのである。

各大隊とも死地を脱するに戦々兢兢々として敵の間隙をぬつて後退する。落伍兵は、そのままに過ぎ去りにせざるを得ないという苦境をあえていた。五月十八、九日ころだと思いが、部隊は夜陰にまぎれて広い平坦地に集結、反転のための再編成を行う。

当夜、満州部隊の牡丹江よりはるばる当部隊に転属になった西川少尉が追及してきた。大隊にわずかしか生存していない将校にただ一人でも幹部が増員されることは何とも例えようのない心強さを感じさせる。ひとまず大隊本部付きとなり、辺りは三日月程度の明るさで、顔もわからぬまま初対面のあいさつをかわした。

再編成後、第三大隊はなおも左側衛として敵と交戦しつつ反転を継続、第二大隊もまた後衛部隊として宝慶への反転を開始す。

昼間の行軍は敵航空機の好餌となるため、行軍を中止して退避すべきであるが、敵地上軍が後方より追撃をかけてくるので、危険を承知で昼夜兼行、食物として一物もない湖南の山岳を谷・稜線を縫って前進をつづける。こんな超強行軍のときに軍旗でも捧持していようものなら、あごを出して苦勞しているだろうに、今は軍刀一つの身軽さ、どれだけ歩いてもびくともしない。かわいそうなのは軍馬だ。飲みたい水と一滴もなく、重機・弾薬は駄載したままで、幾日も幾日も行

軍は続く。背に鞍傷を作り息を切らしてあえいでいる。渴病で死亡する馬も出る始末で馭兵は「青馬よたのむぞ」「秋風号たのむぞ」と身の苦しみを忘れて馬ははげましている。わずか十五分の休憩でも水はないかと探しまわっている者もいる。馭馬が死ねば、十六貫の重機関銃は分解して四人の銃手で搬送しなければならぬ。

愛馬のためには身の苦難をかえり見ずつくす兵隊の姿は実に神のようである。かつて歌った愛馬進軍歌を歌う元氣な兵隊もいる。

忘れもしない、五月二十一日、連隊主力の左側一キロメートルくらいの武崗県遠家沖の稜線を前進中の大隊に、突如左稜線からチェツコ機銃を有する一個中隊ばかりの支那兵に攻撃を受ける。

当時第十二中隊は尖兵中隊で、鞍部を抜けて森中に入ったところ、大隊本部に続く第三機関銃中隊は鞍部の中央部を前進中だった。

敵は数丁のチェツコ銃に加えて、稜線上に散開して我が軍の通過を待っていたのである。敵との距離約二

五〇〇三〇〇、動く敵兵の姿が手に取るように見える。時、午後五時ころだったと思う。

全くの不意打ちである。容赦なく、飛んで来る敵機銃弾は灌木に当たりブスブス音を立て、鉄でも刈るように青葉が落ちる。

付近一帯は物凄い砂塵で狼狽に崩れた。第三大隊は我先にと右稜線上の山に入る。敵射撃の中心が、本部及び第三機関銃中隊であることは明らかで、集中銃弾はもうもうと土ぼこりをあげて道路上に落下する。

私はまだ鉄砲玉がさほどこわいとは思わず、めつたに当たらないものを思っていたので、その場に伏せたまままで敵状偵察をしていた。三番銃手であった御子正春兵長も小隊長の私が平気でいるので重機の脚を持つたまま二メートルばかり離れて伏せている。当時の第三大隊軍医であった奥野正良軍医は、私の左側二メートルばかりのところ建っていた山小屋の入口に軍刀を杖にして立ち、私の方へ「松本少尉、あぶないからさがれ」と声と手真似で言っていたが、それには答

えず、ツンコピンの弾丸があたるものかとおもむろに双眼鏡を出し敵陣を見る。チェッコ銃が白煙をあげて火を吹いている。いずれも銃口は我らの方向である。

これは危険だと思うと同時に、付近一面の砂ぼこりとともに左手を野球のバットで殴打されたようなショックを受けた。

体のどこかに焼火箸でも突きささったような感じがする。敵弾はなおも正確さを増し、ピュンピュン耳をかすめて付近にささる。

フト痛みを覚えて見ると左半身血だるまである。これはやられた。傍らにいた御子兵長も敵弾にさえぎられてよく聞こえなかったが「ヤラレタ」と叫んだようである。自分の血だるまの身を横にして左後方にいる御子兵長を見る。これは大変だ。御子兵長また肩から下全身血に染まってあおむけに倒れて、それでも気丈夫に止血をしている。

敵の擲弾銃が頭上で炸裂しはじめた。これは上空で爆発するので、遮蔽物にかくれていても駄目だ。ツンコピンの弾丸ぐらいと思っていたが急に危険を感じて

きた。このままいたら殺される。何とか身を移動せねばなるまいとダラリさがったフラフラの左腕を傷めぬよう後方へ十五メートルばかり駆け下った。一メートルぐらいの土手があつて、その下に中隊の兵隊がズラリと身を隠している。安全地帯である。脳裏には一刻も早く御子兵長を助け出さねば生命が危ない、と。

不意をつかれた軍隊はあわれである。周章狼狽してなすすべがなく、我が小隊も重機の銃身と脚が離ればなれになつてしまった。銃身はだれかが担いで敵弾をさけている。銃脚は御子兵長が守つて負傷している。

これではいつまでたつても友軍の重機は射撃できない。敵さんは勝ち誇つた勢いで間断なく弾丸を送ってくる。全く動きのとれなくなつた第三大隊主力は、統制のとれぬまま二十分余を経過する。

栃木衛生兵長が駆け寄つて「小隊長殿、どこをやられましたか、治療します」と手当の準備をしかけたが、私は全員に向かつて大声でどなつた。「貴様たち、何をしているんだ、御子兵長を見殺しにする気か、早く行つて助けてこい。だれも行かなければ俺が行く」

「と、土手下で退避している中隊の者が無性に情けなく腹が立つた。秒を争わねばならない。指揮班長の新井曹長（帰還。宇部市在住）が突然土手に駆け上がり、飛び出して行つた。

敵はまた、獲物を見つけたとばかり、猛射を浴びせてくる。新井曹長も危ない、早く帰らねばと思う東の間、元氣一杯の曹長はズルズルと御子兵長を引きずつてきた。だれかが、また飛び出して銃脚を持ち帰る。これで安心だと思つたら急に傷が痛み出した。

栃木兵長もどこをやられているのか、身体一面、血ぬられているのでわからない。夏上衣の袖をピリツと鉄で裂いてしまった。「ここです」と左上臍部から血が吹き出している。腕を貫通しやがった。くそチエツコ銃、今に仕返してやると歯をくいしばりながら、治療を受ける。薬品も乏しく、赤チンくらいである。腕はちよつとも動かない。骨にでもかかっているのか、自分の力では動かすことができないので、首から包帯で腕をつる。全く不自由な身になつてしまった。

栃木兵長も御子兵長の治療を早くと、意識もうろう

と苦しんでいる御子兵長の衣類を剥ぎ取る。肩を一方所もぎ取られ、左膝関節付近を貫通している。これは重傷である。応急処置をして、搬送せねばならない。野戦病院の位置を早く見つけて入院させなければならぬ。

私も上官から入院を勧告されたが、脚は大丈夫だからとこれを断り、邪魔な軍刀は腰にさし、しばらく休養する。

敵は後退の様子もなく、あわてる日本軍に食いさがつて猛反撃を加えてくる。だが日本軍の立ち直りも早い。突如、左後方高台で重機が火を吹く。憎い奴とばかり、速やかに移動した西井分隊の重機関銃は、前方台地の敵陣に正確に弾丸を撃ち込む。また一弾、また一弾と、日本重機関銃の威力を見よ、とばかり数百発の銃弾は勝ち誇った敵陣地を次々と破壊、敵チエツコ銃も沈黙してしまった。

大隊長は急ぎ第九中隊を、攻撃・突撃を敢行せしめて、これを奪取した。時すでに暮色付近を包み、夏の夜星も一つ二つちらつくところとなってしまった。思わ

ぬ敵に遭遇して、時間を費やした大隊は、速やかに行軍序列態勢を整え出発を待つ。

態勢を整える間の大休止は、丘の頂上に集結して、きらめきはじめて星を眺めながら、痛む腕を庇いつつ、果たして片手で部隊と同じ強行軍ができるのだろうか。四囲敵の包囲下の脱出に成功し得るだろうか、あらぬ思いに耽りながら天の川の星空に望郷の心一汐深い。負傷した御子兵長、大腿部貫通銃創で絶えだえの声をあげて苦しんでいた。作業隊の兵隊は早や担架輸送で後送されていった。大隊長も私に入院を勧められたが、これしきの貫通銃創ぐらいでは、と連れそつた部下と共に苦しくはあつても行動したい一念から入院を拒否し、部隊と行動を共にすることになった。

作業隊の負傷した兵隊は水をくれ、水をくれと謹言うやむやのように言っていたが、水をやればガクンと死んでしまふだろう。その後、無事帰還したかどうかは不明である。

夜に入り再び側衛行軍を実施し、行動開始である。暗夜でもここかしこで銃声の絶え間がない。一発弾丸

に見舞われてから鉄砲玉の音がすると、皆自分の体に向かつて飛んで来るように思われてチト臆病になったようだ。少々弾丸が恐ろしくなって、この当たった弾丸が鉄兜をぶち抜いて、あの山裾に埋められて、名もない山中で白骨化するだろうと思うと気も小さくなる。そして軍の一通の戦死公報が一家を悲境のどん底に突き落とす結果になることを思うとき、腕の貫通で幸いだったとつくづく思う。

死地を彷徨した体、何としても生き抜いて帰ろうと、元氣百倍、反転また後退の作戦にも、軍刀を腰にまた肩に担って山道を歩き通した。落伍者が出る。当初は戦友が装具を持ち、銃を持ちして、身軽にして励ましながらの行軍も、日が経過するに連れて自分自身の身を守るに精一杯の最悪の状態になれば人どころじゃない。自分の装具さえ不必要に近いものは捨てての行動は、バタアン死の行進を思わせるようである。落伍者は後へ後へと残り、果ては行方不明となった者もあろうし、敵に捕まえられた者もあろう。敗戦の将兵は攻撃前進の時と打って変わって惨めで、活力もなく、死

の形相を表に現わしながらも生への執着に軍靴を引きずって長蛇の列をなしていた。

帰る道々毎日、栃木衛生兵長の治療を受け、日増しに快方に向かうが腕は少しも動かない。片手は駄目になるかもしれないと思いつながら、連日軍刀を肩に軍公路上を歩く。そのころ、第三大隊は部隊の前衛となり、第一大隊が後衛部隊として敵を阻止しながら後退していった。

道路はどんどん下り坂となり、急に開けた平野に出た。中央部に川が流れ大きな集落がここかしこに点状する。どうやら食物にもありつけそうだが、周囲の山々に囲まれ見渡す限り広い田園地帯は一見平和にくらぶ水郷地帯と見たが、先に後退して行った部隊が荒らしているだろう、為に村民は日本軍に対し強い敵対感情を持つているに違いなく、敵ゲリラ部隊の巢窟になっているかもしれない。油断して物資でも取りに行こうものなら闇から闇へ葬られて、たちまち行方不明になってしまう。水牛も悠々と草を求めて歩いている。水牛の肉でもいい、腹いっぱい食べてみたいと思った。

平野の中央部に、二百メートル平方くらいの小高い森があるので、その中で大休止をとる。平坦地では敵機が常に虎視眈々と機会を窺っているので昼間の行軍は危険である。夜まで約半日、この森で昼休みとする。

だれしも求める憩いのオアシスは同じか、森の中は兵隊で満員であった。五月末の照り付ける太陽に日焼けした体を休めるには最適の森林で、まるで別荘にでも来たようである。駄馬も久方ぶりに水を十分飲んで生き生きとして目を輝かせて前掻きをしている。皆は今夜からまた引き続いでるの行軍に備えて横になり、帽子を顔に安らかな夢をまどろんでいる。

森の先端には野戦病院の輸送隊が大休止をしていて、私と同じに負傷した御子兵長も苦しげに馬の背の担架に身を横たえていた。一足先に出発する御子兵長を送って口々に元気でやれよ、また会おうと激励していた。ほほえましい風景である。

クーリーに担がせた担架にて運ばれる兵隊の数もおびただしく、精気のない体はいつ朽ちるとも計り知れないほど衰弱していた。野戦病院も菓の補給はもちろ

んのこと、食物の収集はなおさらできない。栄養失調になる者も数多く、当時は入院したら殺されるようなものだと、とんだうわさもあつたくらいで、敗戦直前の最前線の部隊に十分なる菓剤補給があるわけがない。下痢なんかは笹を焼いた灰を整腸作用にしていたとも聞いている。

終戦後、あわただしい復員事務を終わってようやくにして内地の土を踏んで帰還した当時、負傷した御子兵長はまだ伊勢市の日赤病院で入院加療中で、膝関節をやられたため跛蹇はひんになっているが夫婦むつまじく、呉服商を経営しながら多気町役場に勤務している。しかし戦傷の痛手はなお癒えず、戦場を憎みながらも、愉快に当時のありし物語を語ったことも度々あり、今なお良き友として付き合っている。

今見る傷跡は生々しく肩をえぐられ、膝関節付近は跳弾のために大きな傷跡となつて、見るも傷々しいくらいだが、当時を忘れて現在は、多気町幼稚園園長として町政にたずさわっている由、喜ばしい次第である。

蒸しかえる森林内の大休止も、当初は涼風あふれるオアシスと思われたが、午後の日差しの差すころは暑さは厳しく、点々と場所をかえて休みを得られぬ体をもてあましていた。兵隊は今夜からの夜行軍に備えて食糧準備に多忙である。だが宝慶は近く、ようやくにして死地を脱した喜びは隠し切れず、将兵の顔は明るく輝いていた。

負傷した腕も少しずつ動くようになり、この分では骨髄にも支障なさそうで元の体に回復しそうである。

尖兵部隊の我々がのんきに大休止している間も、後衛尖兵たる第一大隊は敵の猛追撃に遭って苦戦をしているらしく、いまだに山岳内であって我々のいる平野部に脱出しきれず、後方の山々では盛んに銃砲声がかだまして激戦展開中らしく、双眼鏡で見るとその方向には白煙が上がって戦闘中を物語っている。

第一大隊ご苦労さんと言ってやりたい。本隊の反転を容易ならしむるためには、何としてでも敵の追撃を食い止めねばならない。我々同年兵である第一機関銃中隊の山川少尉（本籍、松阪市山添。現在、大隈市在

住）も後衛部隊の機関銃小隊長として戦闘指導中迫撃砲破片創を受けて負傷しながらも最後まで戦闘指揮を執ったとのこと、とにかく反転作戦の後衛部隊は死地に追い込まれたも同然で、敵を側面に受けながら本隊の犠牲となつて最後尾を死守しなければならぬ任務を付与されているので、敵はこっちが退く直後を追っている。落伍者はもちろん、捕虜となるか殺されるかいずれにせよ命はない。

この芷江作戦の最終的に苦戦する畠谷第一大隊のお陰で、前衛並びに本隊は悠々安心して後退し得ることができた。

やがて資江（宝慶川）の大河が目前に見えたきた。ちょうど梅の実をたくさんつけている盛りで、資江岸地帯には大きな梅林がいくつもあつたのを記憶している。この河を渡れば出発前の駐留地に入る。腕は相変わらず三角巾で肩から吊って、負傷者の一人として無事宝慶大橋を渡ることのできる喜びは格別なものであった。

「嵐」部隊は宝慶到着と同時に新任務につくべく準備

し、各部隊はまた別れ別れとなり新警備地に向かうこととなった。

かくして、ここに芷江作戦は終末を告げたが、四月初旬行動開始してから約一カ月半、湖南の広野を連日敵航空部隊に悩まされながらの進攻作戦は言語に絶する苦痛なる毎日であった。

特に山岳戦のため、食糧の欠乏は戦力に大きな影響を与えた。「弾」「広」部隊とも、同様、予想外の抵抗をして我が前進をがっちりくいとめた願祝同麾下の大軍には思っても見なかった堅固な防御陣地を構築されて、いかに関東軍の精鋭でもこれを突破することができなかつた。「嵐」部隊も常德作戦、湘桂作戦と相次いで湖南大作戦に参画した精鋭部隊であったが、同じ運命にさらされて数多い犠牲者、特に将校の戦死、戦傷は数多く、敗色濃いところは全くの敵包囲下にさらされて、全滅の危機に追いつめられたが、死力を尽くして活路を開いて、今ここに宝慶大橋を無事渡河することのできた我々は、不幸中の幸いと言わねばならない。

【解 説】

一 芷 江 撤 退

芷江作戦の目的は、昭和二十年初頭、支那派遣軍総司令官に新任された岡村寧次大将は、対支戦争のどめを刺すのは重慶進攻作戦であるので、第二十軍にまず芷江を攻略させ、その様子を見る。その主力となる第十六師団（嵐）に対しては、峻険な山岳地帯を突破し芷江飛行場を攻略する研究と訓練を行うよう指示していた。

先の湘桂作戦で、第三、第十三師団が貴州省に突入したとき、政府では日支停戦講和が沸騰していた。このような経緯の中で、支那派遣軍は一举に日支関係を修復し、太平洋戦況を好転させようとの意図をもったのであろう。

研究結果では「芷江付近を攻略し敵航空前進基地を覆滅するためには三、四個師団を要するであろう。しかし、芷江付近まで進攻は危険であり、芷江の線が限度」と二月の研究結果がでていた。また重慶軍は米式化等戦力は向上し、空軍増強、活発化が予想されてい

た。しかも、一方我が第二十軍は衡陽攻略戦で戦力が低下していたし、第十一軍を柳州、桂林方面より中・北支方面に兵力転用を命じられていた。したがって、芷江作戦を四川攻略に変更、敵の前進基地を覆滅、重慶軍の総反攻を破摧し、東主、西従の転換を可能なものとして計画どおり、四月十五日、第二十軍は芷江作戦を発起した。

しかし、中国軍は大部隊が空輸で芷江に増強され、我が軍の進撃速度は鈍化、湘桂沿線兵力撤収などから、芷江進出は困難と判断した。五月四日午後、軍は「第一百十六師団は一時重慶軍との決戦を避け山門―洞口付近に反転、同地周辺の要線を占領確保し、これを支拂とし所在の重慶軍を撃滅すべし」と命ぜられた。

歩兵第三百三十三連隊（体験執筆者松本氏所属）は五月四日、鉄山の頂上、青岩の最高峰の争奪をめぐり彼我激戦中であるが戦闘はわれに有利と判断されていた。

生と死の青春記録

新潟県 佐藤 藤吉

大正十三年生まれ、昭和十九年現役徴集。城川村立青年学校本科教育中、第三小隊長として軍事教練を受けていたが、入隊のため繰り上げて卒業式をした。「海征かば水漬く屍、山征かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、顧り見はせじ」と合唱して別れた。ラバウルで転進作戦、サイパン島、アッツ島など玉碎し、戦局暗雲の時期の出征。出発の靴を履くとき茶碗酒を注いでくれた父。神社前で出征の決意を述べたとき石灯籠に顔を隠した母。昭和十九年九月一日、仙台市の東部第二十七部隊野砲隊に入隊した。

野砲隊には宮城県、福島県、新潟県からの戦友で、軍装支給や「忠礼武信質」の五カ条の教育を受け、五日午前四時軍用列車で仙台駅を出発した。輸送指揮官丸山少尉以下六名の下士官の指示のもと、下関に七日